



## 「我が球歴」

昭和40年卒 堀川隆夫

長工野球部OBとして、後輩選手の参考になればと思い筆を執ることにしました。

小生が正式な野球を始めたのは長工野球部に入部してからで、興味一杯の素人でした。

1年生から2年生の夏までは先輩のサポート、球拾いに明け暮れた毎日でしたね。

新チームが結成される前、正捕手になると思われたT君が退部し急遽、バッティングキャチャーをやっていた数名の中から比較的、肩が強かった小生が一塁手からコンバートされ、正式に捕手をやることになった。叔父が野球の経験者だったことから捕手の心構え、練習方法等をアドバイスして貰いながら練習に取り組んだ。

2年生の秋から新チームが結成され我々が主体となって強いチームへと変身していった。

何故、我々の時に強くなっていったのか記憶を呼び戻してみたい。

まず、倉本主将を中心にチームワークが良かったし体罰もなくまとまって良く練習した。次に投手陣は原口、本村、山内と3枚揃い、内野陣は守備が固く、外野陣は小粒であったが無難で総じてまとまっていた。素人捕手も盗塁阻止のため正確で早いスローイングにと心がけ、チームは守備が固いチームになっていった。

そして新人戦や九州大会長崎県予選を勝ち進みチームとして自信をつけた事が大きかった。今、思うに奇跡的な感じであったが県予選で優勝し、九州大会に出場した。しかし新チーム唯一の大敗（長工1対8鹿児島商）を喫す。桜島が爆発し相手に撃破されチームが悔しい思いを経験した。これを機に更に練習に励む。春の九州大会長崎県予選は準優勝し長崎県主催の春の大会に海星と2校出場し熊本工に3対5で惜敗。

高校生活最後となる夏の甲子園出場を目指して予選が始まり、連戦連勝で決勝に進出。海星に0対2で惜敗し夢破れ全て終わった？。守備の人であった小生は夏の予選では11打数5安打と変身。亡くなった父親と妹に3塁打を見て貰った事が思い出深い。

これで野球と縁が切れると思いきや、就職内定先の会社から希望（長崎）とは違った広島勤務を命じられ且つ社会人野球をやれとの連絡があり、野球を続けることになった。

社会人野球は5年間経験したが最初の3年間はブルペン捕手の下積時代。当時は週休1日で定時まで仕事して午後5時頃から暗くなるまで練習し日曜日は朝から夕方まで練習の繰り返しであった。捕手も5人いてレギュラーの座は遠い道のりであった。社会人野球のレベルは高く、体重も60kg程度しかなかった小生の打球は外野手の頭を越すことはなかった。チーム内の紅白試合でも捕手はやらしてもらえず、外野を守った我慢の時代。ただ、密に磨きをかけていたのがスローイング。沢山の投手の球を受け、最後に投手の方

に本塁と二塁の距離程離れて頂き、スローイングの練習を根気よく続けた。

先輩のレギュラー捕手の方は打力はあったが弱肩であったので無駄な失点で敗戦に追い込まれる事もあった。いつか自分がレギュラーにと努力を続け、4年目についに実現し、チームが成績を残せるようになった。新日鉄広畑が黒獅子旗を獲得（全国制覇）した翌年、広畑へ遠征し5個の盗塁を阻止、3個成功されチームは敗れたが強いチームは積極的だなと感じたものでした。全国選抜社会人野球岡山大会では日鉱日立と対戦し劣勢といわれた三菱はエースの好投もあったが前半、日鉱が試みた3回の盗塁をきれいなスローイングで刺した堀川の強肩が光っていたと新聞記事に載りました。また都市対抗県予選の準決勝では国鉄中国に5対3で勝ち、3打数2安打（2塁打1）と好打者に変身？4点目のタイムリー打の写真入りの新聞記事に載りました（2度目で最後）

自分の野球人生の宝としてこの記事の切り抜きを大事にしています。

社会人野球は5年間経験しました。仕事が多忙になり造船技術者として早く一人前にならなくてはという夢もあり、円満に退部させてもらいました。その後10年程経過し、三菱広島は都市対抗初出場を果たし初出場初優勝の快挙を達成し大喜びしたものでした。

さて野球の技術論は次回投稿するとしてひとつだけ盗塁阻止の秘訣を記述します。

最初は相手ベンチのサインを盗む事から始まります。サインを盗むのはコツがあります。相手ベンチを直視せず投手方向を見てマスク越しに横目で相手監督のサインを盗むのです。（無警戒のフリが横目なのです）直視したら相手監督はサインは出しません。盗んだら心構えが出来、慌てなくて済みます。次にウェストのサインを投手に送り捕手が素早く送球出来る高さに投げさせ、2塁ベースのタッチし易いゾーンへ送球すればピンチが防げるのです。やみくもにウェストはさせません。（サインを確実に盗むのです）

工業高校生らしく頭を使って野球をしましょう。体力だけでは勝ち続ける事は出来ません。

OBからの先輩の皆さんへのアドバイスとしては負けて悔しさを勝って喜びを感じとって更に夢（甲子園）を目指して勝ち続けるために何を成すべきか真剣に追及して欲しいのです。グラウンドの練習以外に自分の欠点を改善、強化するため努力すべきです。

自転車通学して足腰を鍛えるとか、試験勉強中に眠たくなったら夜中の素振りや寝気を覚まし下がった成績を戻すとか文武両立させるべく頑張ってください。

今回は精神論的ではありましたが小生の体験の中から将来に向かって元気を感じて貰えれば幸いです。次回は又お会いしましょう。

以上

堀川先輩は捕手で、練習後だぶだぶのプロテクター（色あせた黄土色）をつけて盗塁を阻止するためのセカンドまでの投球練習を懸命にしていたのが思い出されます。（当時は満足な道具も器具もなかった。）

# 優勝戦は電電―三菱

## 準決 勝 二三菱、二回で決める



国鉄中国―三菱広島三回裏、三菱七番堀川右前打で二走志和久を返し4点目、国鉄を大きく引離す

**都市対抗県予選**  
 第四十回都市対抗野球県予選  
 (毎日新聞社など共催)は十三日午後三時から広島市民球場で国鉄―三菱広島準決勝再試合が行なわれた。十一日には降雨で引

分けたが、この試合に勝てば二次予選の中国大会出場権が得られるとあって、どちらもエースを登板させ必勝の気構え。三菱広島は三回、集中打の威力で試合を決め、きょう十四日、電電中国と紅獅子旗(県大会優勝旗)を争う。

最終日のきょう十四日は午前九時から同球場で広島マツダ―三菱三原、日本鋼管福山―国鉄中国の敗者復活戦二試合(勝った方は中国大会への第三、四代表になる)と続いて決勝戦(午後三時の予定)が行なわれる。

▽準決勝(再試合)  
 国鉄中国000000003000―1  
 三菱広島005000000000X―5  
 三菱は三回の猛攻で大躍り点をあげ、投げても富田が国鉄の追撃をふり切った。三回三菱は先頭の真木が中越え二塁打すると中本、近藤、志和久、稲田、堀川、富田

と長短打をつるべ打ち。結局、打者十一人で5点。  
 国鉄は六回までカーブ、シュート、速球をコントロールよく投げ分ける富田に完全に押えられ、わずかに安打だけ。やっとな七回、島田死球、一死後、高野中前打で一、三塁、大島の左中間二塁打、藤井の内野安打、砂川の遊ゴロで2点差に追いあげ、八、九回にも走者を出したが落着いた富田をくずせなかった。(福士)

【国鉄】打安点	【三菱】打安点
吉田 3 0 0	中本 5 1 0
田中正 1 0 0	藤井 3 2 2
池田 3 2 0	山田 2 4 1
高野 4 4 0	福井 1 0 0
大島 4 4 1	森井 0 0 0
藤井 3 4 1	志和 1 1 1
堀川 1 1 1	久 3 1 1
中西 2 0 0	川田 4 1 1
砂中 1 1 1	和 3 1 1
徳川 1 2 0	木 3 1 1
米田 1 0 0	田 3 1 1
川本 2 0 0	真 3 1 1
西田 3 0 0	木 3 1 0
振 3 4 1	振 1 4 6
振 3 4 1	振 3 0 10
振 3 4 1	振 3 0 10

